

古都近辺の名桜

「願はくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃」桜花をこよなく愛し、花の歌を数多く残した西行法師の作である。西行はこの歌のとおり旧暦の二月十六日（新暦では三月十九日、1190年）、河内の弘川寺にて七十三才の生涯を終えたといわれている。西行にあやかり花の下にて死ねたらと願うほどに、また三月の声を聞き東風（こち）が吹き始めると、今年の花見はどことそぞろ心浮き立つほどに桜にはまり込みっぱなしの来し方を過ごしてきた私である。そこで私の桜歴を振り返り、古都とその近辺の名桜「一本桜」を中心にご紹介させていただくことにした。

まずは京都、洛中洛外の FAVORITE SPOTS から。

① 修学院離宮

宮内庁管轄の本離宮は、参観希望時期の3ヶ月前、4月であれば1月1日からの受付になる。往復はがきに指定の書式で書き入れ京都御苑の宮内庁事務所へ申し込む。江戸初期、風流人で名高い後水尾上皇（ごみずのおじょうこう）が別荘として造営されたもので、下の茶屋、中の茶屋、上の茶屋と比叡山西南山麓を上へ上へと登りながら回遊する広大な庭園である。上の茶屋は浴龍池という大きな池を回遊する地形になっており、この池の西南側に山桜が3、4本ありこれが見事である。幹も太く、枝ぶりも横に十分広がっている。名苑であり拝観者は限られているので、絶好の環境で花見ができるわけで、このような贅沢は他ではなかなか経験できるものではない。私は何度この地を訪れたことか。



浴龍池と山桜

② 上賀茂神社

本殿の前庭である馬場の東側にしだれ桜の古木がある。枯木と書いた方が相応しいほどに太い幹に、どちらかといえば寂しげに幾本かの枝が広がり白い花をつけている様がかえって風情を感じさせてくれる。京都での最後の帝、明治帝の父君、孝明天皇が御所から下賜したもので、御所桜と呼ばれている。そしてその隣に爛漫と咲き乱れている紅しだれがあり、斎王桜と名つけられているが、この対象がお互

いを引き立てあっている。ここは花見客も少なく、神苑西向かいの名物、神馬堂の焼餅をかじりながら、花とだんごで、ひねもすのんびりした時間を過ごすことができる。



御所桜



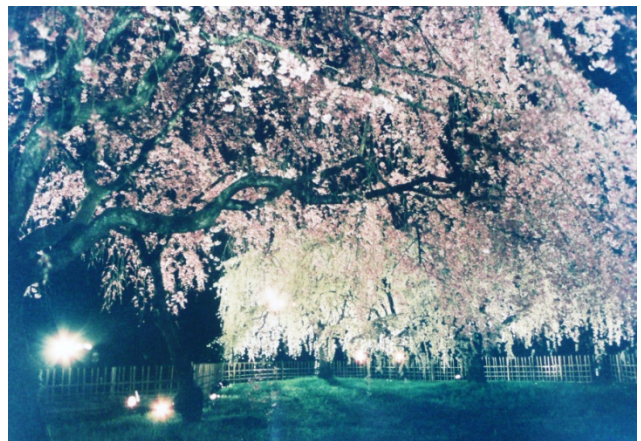
斎王桜

③ 京都御苑（御所）

地下鉄今出川駅の最寄り、御苑の北西部に児童公園があり、この近辺は何種類かの桜が植わっている。御苑には専属の庭師が何人かおられ丹精こめて世話をしておられるので、いずれも最高の状態で開花している。公家筆頭の近衛公の庭跡、近衛池の畔にしだれ桜が4、5本ある。竹垣に囲まれ樹下はタンポポの花が咲き乱れ絵をみるように美しい眺めである。また2本ずつ花時がずれているので4月中楽しめるのも庭師の配慮であろう。このしだれ桜のひとつは「近衛の糸さくら」と呼ばれ由緒の深いものである。前出の明治帝の父君、孝明天皇の御製「昔より名にはきけども今日みればむべ目かれせぬ糸桜かな」（目かれ＝目離れ、目を離す）がある。数年前NHKの生放送でライトアップされたことがあり、偶然情報を入手し夜桜を見ることができた。夢のような春宵の一刻であったが、常時は夜桜は観られない。



糸桜



夜桜

④ 常照皇寺（じょうしょうこうじ）

京都の北方、花背から西へ7、8キロの山あいにあるこの寺は観光案内にも出ており、花見客も訪れるが、それでもかなりの道のりを車で走ることや、この寺以外に近辺は特に何もないので、洛内の花どころに較べれば随分静かに花見を楽しむことができる。九重桜というしだれ桜が数本、いずれも古木で庭を埋めて咲き乱れており、歴史を感じさせる奥ゆかしさがある。南北朝時代—北朝の初代、光厳上皇（こうごんじょうこう、1362年）の建立—のこの寺院建造物自体が美しく時間の経つのも忘れて長居をしてしまう。御車（みくるま）返しの桜という若木が本堂前に一本あるが、これは前出の風流人で名高い後水尾上皇が九重桜を観に行かれた時、帰り道で振り返ったところ、この花が目に入り大変美しかったので車を返したとの言い伝えによるもの。ただし今の木は2代目か、3代目か、若木である。一重と八重の花が同じ木に咲いている。花時が九重桜より遅いので同時に見るには時期を合わせるのが難しい。



九重桜



御車返しの桜（左は先代の枯木、右は若木）

京都には至るところに名桜があるが、いずれも人出が多く落ち着いて時を過ごすとなると、上のスポットは他所の花が人並みを引き付けてくれるお陰で静かなのが何よりである。

次は古都、奈良方面の銘木。

⑤ 井手の地藏禅院

京都から車で奈良街道（国道24号）を南行し、木津川を右に見ての快適な道を抜けたあたりに井手町という村落がある（JR玉水が最寄り駅）。ここは明日香から奈良へ遷都した当時の左大臣、橘諸兄（たちばなのもろえ）の旧跡、郷里でもある。この村に流れる玉川堤の両岸の桜並木は桜祭りで賑っているが、あえて雑踏は避けて、この村の東山麓にある地藏禅院まで山道を登ると、境内に見事なしだれ桜が数本あり、京都、円山公園の名物桜はこの桜を移したものである。丸山の桜ほどには手入れは行

き届いていないが、同じしだれが数本乱れ咲いている景色を想像されたい。眼下には菜の花畑が広がり、木津川堤が見渡せ、絶好の立地でもある。このシーズンには地元の人が桜餅や花見団子を売りに来ており、花と団子を楽しむことができる。下界の玉川の花見ついでにやって来る陽気な人たちを避けて、week day に出かけたいところである。



地藏禅院、しだれ桜

⑥ 大宇陀本郷の又兵衛桜

名阪国道、針インターチェンジで降りて12～13キロ南行すると大宇陀の村落に着く。村はずれの阿紀神社の近くにこのしだれ桜はある。大阪冬の陣、夏の陣で真田幸村と共に豊臣方に参戦した後藤又兵衛の郷里と言われ、立派な石垣の上に大木が立っており、又兵衛桜と呼ばれている。回りは桃の果樹園となっており桃花を背景に石垣の上に咲き誇る豪華さは絵になる景色である。地区の方々が村起こしに熱心で、夜桜も楽しめるよう整備されている。数年前の大河ドラマ、たしか直江兼続の話であったかに紹介されたようで、直後は結構な見物客が訪れたようである。遠出の価値がある見事なものである。



又兵衛桜 大宇陀本郷

千年桜 仏隆寺

(写真は何れも石井桂輔氏撮影)

⑦ 仏隆寺 千年桜

長谷寺、大野寺、室生寺と桜名所をまわり、室生寺から山道を西へ4キロ程走った辺りに仏隆寺がある。上記の大字陀からは東へ4、5キロのところでもある。仏隆寺は小高い丘の上に建っており、石段を登っていく途中の斜面にこの名物桜はある。この桜は山桜、里桜、霞桜といった通常の種類には当てはめ難く、これ一本だけではあるが仏隆寺桜と分類されているとのことである。相当の古木で、太くて垂直にそそり立った幹から直線状の枝が横方向に広がりシャープな姿で、花は小ぶりで白色である。上記の数々の花とは一線を画した **EXCLUSIVE CHERRY TREE** である。石段の左右には彼岸花の青々とした葉が密生しており、秋もまた曼珠沙華の赤と桜紅葉の美しい眺めが思いやられる。

私のようないわば「花狂い」を批判した古歌がある。

「花をのみ待つらんひとに山里の雪間の草の春を見せばや」藤原家隆 — 新古今集

なるほど耳の痛い文句ではある。千利休はこの歌にわびさびの真髓をみていたく愛で、大阪城の茶室は「山里丸」と名付けたほどである。しかし私にとってはまだまだ東方に北方に憧れの桜たち — 根尾村の薄墨桜、三春町の瀧桜、盛岡の石割り桜、角館の武家屋敷桜、等々 — が待ってくれている。この心境になる日がやがて来るのか、はなはだ心許ない次第である。

(昭35・色染 松岡謙一郎)